CHAPTER 3

気の基本病理

3-1　病理の法則性

それでは基本病理に入っていきます。巻末の資料（総括表）をしっかり覚えておくと臨床にとても役に立ちます。なぜなら弁証に関して，病理に関することは基本的にはこれですべてだといえるからです。

ここでは近道法を紹介しておきます。１つひとつやるとけっこうな量がありますが，法則をしっかり把握すると，すごく近道になります。「一を知りて三を知る」「一を知りて五を知る」「一を知りて十を知る」ことができるのです。法則を把握しないで１つひとつやれば，10 やったら 10 です。しっかりと法則を把握すれば，いくつかやれば全部がわかるようになってきます。

法則を把握しよう！

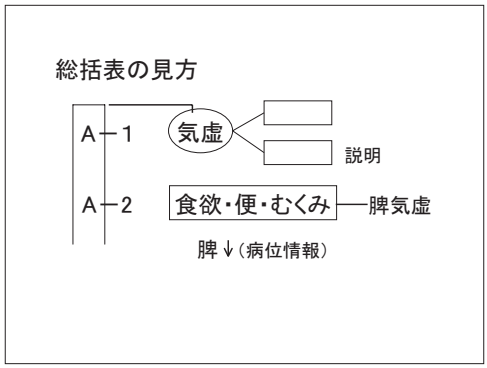
１を知りて３を知る

１を知りて５を知る

１を知りて 10 を知る

こぼれ話 3-1

［総括表の見方］



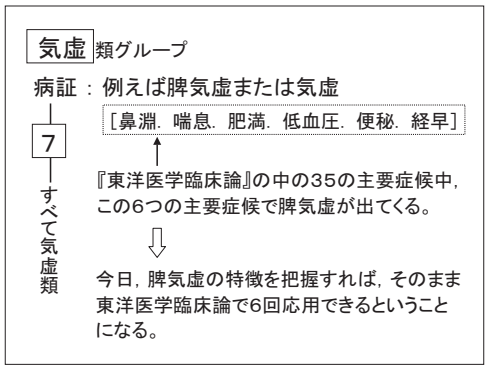
3-2　気虚

3-2-1　気虚類のポイントは？

これから法則を簡単に紹介していきます。

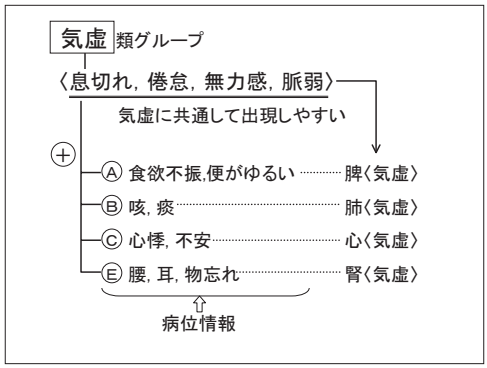
まず気虚類についてですが，気虚という病態はどのような病態なのか，気虚にはどのような特徴的な症状・所見が現れやすいのかをしっかり把握しましょう。

気虚類すべてに共通して出現しやすい症状・所見として，無力感・倦怠・嗜睡・懶言（らんげん）・自汗・息切れ・活動時に症状が増悪・舌質淡・脈弱無力があります。



3-2-2　ケーススタディー１：Aさんの場合

気虚に出現しやすい症状・所見として，息切れ・倦怠・無力感・脈弱の４つをまず把握しましょう。



Ａさんにはこの４つの症状があり，さらに食欲不振で便がゆるいという症状を訴えているとします。食欲不振で便がゆるいというのは脾の問題ですから，Ａさんの病位は脾で，病理は気虚ということになります。便がゆるく食欲もないのは脾の水湿の運化が悪くなっているためです。このことから，臓腑では脾に問題があることがわかります。加えて，息切れ・倦怠・無力感・脈も弱いというのは気虚の症状です。したがってＡさんは［　　］ということになります。

3-2-3　ケーススタディー２：Bさんの場合

次のＢさんは咳がなかなか止まらず，痰もからんでいます。そして息切れ・倦怠・無力感・脈弱という症状もあります。このことからＢさんは［　　］ということがわかります。

気虚に共通してみられる症状を把握しておくことの重要性がわかりましたか？　まず気虚という基本病理に出現しやすい症状をしっかり覚えて，さらに病位を把握するための病位情報をしっかり把握していくと，弁証の結果が出てくるのです。五臓の病位情報については，蔵象理論のなかですでに紹介してあります。五行スコアを参考にしてください。

3-2-4　脾の病位情報＋気虚＝脾気虚

総括表の脾のところをみると，便の問題・食欲の問題というのは脾の情報だということがわかります。先ほどの例でいうと，Ａさんは息切れ・倦怠・無力感・脈弱といった症状をもっているわけですから，病位は脾で，病理は気虚，したがって［　　］証ということになるわけですね。気虚の症状をきちんと覚えて，あとは病位情報をあわせれば気虚は卒業です。

東洋学術出版社から出版されている『中医弁証学』という本のなかでは，弁証のポイントが紹介されています。法則性にもとづいて数百もある証を分類していますから，短期集中型でかなり多くの病証を，法則性を把握しながら一気に自分のものにできるすばらしい本です。要するに鑑別学のノウハウが全部入っているのです。

こぼれ話 3-2
［ケーススタディー3：Cさんの場合］

こぼれ話 3-3
［ケーススタディー4：Eさんの場合］

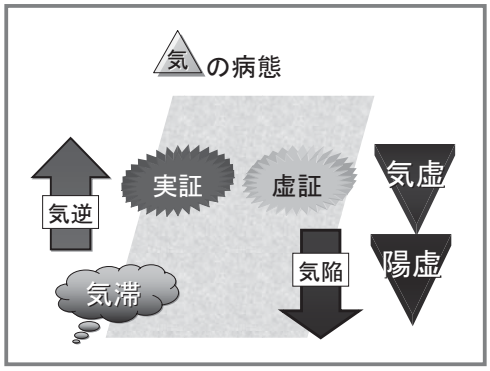
3-2-5　気の病理は気虚と気実の２つ

気の病態は，大きく分けると２つあります。虚か実かです。

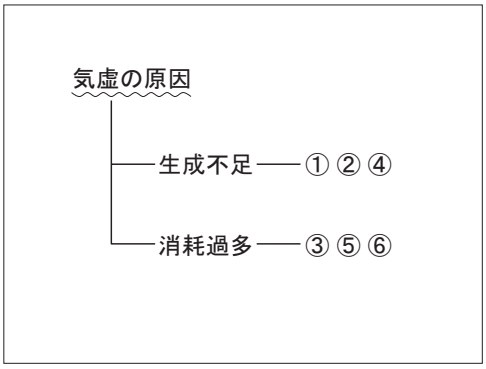
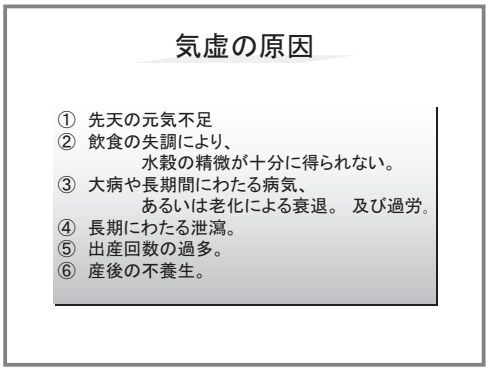
実証の代表が気の滞り，つまり流れが悪くなる・詰まるという病態です。これを気滞といいます。それをベースにして起こるのが衝き上がり現象である気逆という病態です。これについては後ほど詳しく見ていきます。

虚証としては，まず気虚があります。さらにこの気虚が進行すると陽虚になります。これも後ほど紹介します。また気虚をベースにして下垂現象が起こります。これを気陥といいます。

まずは気の病態として実証を２種類，虚証を３種類，しっかりと把握しましょう。



3-2-6　気虚を引き起こす原因　ポイントは生成不足と消耗過多

気の病態を１つずつ見ていきましょう。

最初に登場するのが先ほど紹介した気虚類です。気虚を引き起こす原因は大きく分けると２つになります。生成不足と消耗過多です。消耗過多というのは，使い過ぎということです。